

特集

The Revived Beauty of Asuka and Nara Period Textiles:
Treasures from Horyuji Temple on View for the First Time

甦った飛鳥・奈良 染織の美 — 初公開の法隆寺裂 —

2014年8月19日(火)～9月15日(月・祝)

東京国立博物館 法隆寺宝物館第6室

Tuesday, August 19 – Monday, September 15, 2014

The Gallery of Horyuji Treasures Room 6,
Tokyo National Museum

東京国立博物館では平成22年度から25年度に渡って、所蔵する法隆寺裂ほうりゅうしぎれ（法隆寺に伝来した染織品）のうち、ガラス挟みの状態で保管されてきた作品の修理をして参りました。今回の特集では平成24・25年度の修理作品から53件を選び、陳列いたします。

これらの裂は法隆寺から皇室へ献納された後、明治15年（1882）に当館へ納められた法隆寺献納宝物けんのうほうもつの一部を別途整理したものと推定されます。なかには聖徳太子の薨去（622年）にともなって製作された天寿国繡帳てんじゅこくしゅうちやうの断片や、絹に描かれた絵画としては日本最古級と目される淡茶地白虎文描絵綾天蓋垂飾うすちやじびやっこもんかきえあやてんがいすいしよくなど、献納宝物本体にも見られない貴重な作品も多く含まれ、今後多方面からの研究が期待されます。

これまで保存上の理由から公開されることのなかった法隆寺裂の数々をご覧いただく貴重な機会をお楽しみください。

From fiscal year 2010 to 2013, Tokyo National Museum has conducted restoration work of ancient textile fragments in the museum collection. The works derive from Horyuji temple, Nara, and have been preserved between glass plates until then. This exhibition introduces a selection of 53 works restored in FY 2012 and 2013.

The textile fragments were presumably part of the treasures gifted from Horyuji to the imperial household, and were stored at this museum in 1882. Notable examples include fragments of the *Embroidery of Long Life in Heaven* (Tenjukoku Shucho) tapestry made in memory of Prince Shotoku, who died in 622. *Canopy banner with white tiger design on light brown ground* is another important work, which is thought to be one of the oldest paintings on silk found in Japan. Likewise, many works have significance that cannot be seen even in the museum's Horyuji Treasures collection. Hopefully, these works would benefit studies in various fields.

We hope visitors enjoy this opportunity to see the textiles from Horyuji, which previously have not been exhibited for conservation reasons.



あかじ はないりれんじゅえんもんにしきてんがすいしよく
赤地花入連珠円文錦天蓋垂飾

**Pendent ornament for canopy, with flowers
in bead roundels design on red ground**

絹製 経錦 飛鳥-奈良時代・7-8世紀

I-336-64

天蓋に廻らされた垂飾の残欠。連珠円文内に花を取めた模様で、鮮やかな赤い色彩がよく残る。経錦という、各色に染められた経糸の浮き沈みで模様を表わしている。これは奈良時代以降に一般化する緯錦よりも古い技法で、法隆寺には多くの作例が伝来した。



ちやじ か きらうもんすり えへいけん
茶地花卉鳥文摺絵平絹

**Cloth fragment, with flowering plants and birds design
in block printing on brown ground**

絹製 平織、摺絵 奈良時代・8世紀

I-336-3b

薄い茶色に染められた平絹に、木版を用いて墨で花や鳥を摺り出している。現在正倉院に所蔵される法隆寺混入裂（明治11年(1878)に法隆寺が皇室に宝物を献納した折、一時作品を保管していた正倉院に留め置かれた染織品）のなかに一連の断片が複数残されており、これらを総合すると、向かい合う鳥の上部に草木が茂り、その咲き乱れる花に数羽の鳥がとまる図像であったことが知られる。



きんじりゅうれんげもんつづれおり
金地竜蓮華文綴織

Cloth fragment, with dragons and lotus flowers design on gold ground

絹製 綴織 飛鳥時代・7世紀

I-336-83

パルメットを伴う宝珠・蓮華・竜を交互に表わした綴織の断片。地の部分には和紙に金箔を貼った箔糸（平金糸）が用いられていたが、現在はほとんど脱落している。パルメットの一部を長く伸ばす形は韓国・百済の美術にしばしば見られ、竜首水瓶（法隆寺献納宝物N-243）に表わされたペガサスの翼にも類例が認められる。



うすちやじ びやくこもんかきえあやてんがすいしよく
淡茶地白虎文描絵綾天蓋垂飾

**Pendent ornament for canopy,
with painted white tiger and snake design on light brown ground**

絹製 平地浮文綾、描絵 飛鳥時代・7世紀

I-336-2

天蓋の周囲に廻らされた垂飾の断片。平地浮文綾という技法で多重の亀甲繫文を表わした下地裂に、白虎の姿を描く。周囲に漂う雲気やパルメットの形は天寿国繡帳（622年頃）や高句麗古墳壁画に近似する。白虎の姿も高松塚古墳やキトラ古墳の壁画より古い様式を示し、我が国に残る絹に描かれた絵画として最古級に位置付け得る点も注目される。



うすちやじ そうほうれんじゅえんもんにしき
淡茶地双鳳連珠円文錦

Cloth fragment, with paired phoenixes and bead roundels design on light brown ground

絹製 経錦 飛鳥-奈良時代・7-8世紀

I-336-69

向かい合う鳳凰を中心として、四方に多重の方形を配した連珠円文が廻り、断片の角には蓮華を中心として華麗な唐草が展開している。現在は褪色や擦れが甚だしいものの、鳳凰の翼や脚には黄緑色が残る。経錦という古様な技法で織られたものだが、類例中でも特に模様の表現がこまやかで、その出来栄から中国・唐時代の製作である可能性も考えられる。



復元図

しまじりゅうもん ししゅう
縞地竜文刺繍

Embroidery, with dragons design on striped ground

絹製 平織、刺繍 飛鳥時代・7世紀

I-336-93

赤・青緑・黄・茶で色分けされた地に、竜と見られる動物が、極めて緻密な刺繍で表わされている。撚りの強い糸を使用した刺繍は天寿国繡帳に近く、抽象化された竜の姿も古墳時代の帯金具や鞍金具に見られる例を思わせ、極めて古様である。もとは帯状に長く、中央で折られた痕跡が横方向にわたっている。



てんじゅこくしゅうちょう
天寿国繡帳

Fragment of the *Embroidery of Long Life in Heaven (Tenjukoku Shucho)*

絹製 平織、羅、刺繍、平織の地は後補 飛鳥時代・推古天皇30年(622)頃

I-336-92

聖徳太子の薨去後、妃の橘 大郎女が発願して作らせた天寿国繡帳の断片である。蓮華や雲気とともに、向かって左上方には亀の姿が認められ、いずれもごく緻密な刺繍で表わされている。製作当初は赤紫の平絹に紫色の羅を重ねて下地裂としていたが、近世の修理により白地平絹に縫い付けられている。



あかじ かんどんざれ
赤地広東裂

Fragment of Kanton

絹製 経絣 飛鳥-奈良時代・7-8世紀

I-336-91-2

経糸を括って赤紫・赤・黄・黄緑・青に染めて織り出した経絣の断片。煙のように立ち昇る雲気文は法隆寺金堂四天王像(7世紀半ばの制作)の袴にも描かれた古い様式を示している。四角く裁断された裂を廻って針孔が残り、もとは幡の幡身第一坪目であったと考えられる。

法隆寺裂の修理成果

今回展示した作品は昭和12年(1937)頃よりガラスに挟まれた状態で保管されてきましたが、長年の間にガラスの中で裂が移動したり、ガラス内が白く曇るなど、問題のある状態が続いていました。特にガラス内面に生じた結晶状の曇りは作品を取り巻くように広がり、これが裂の保存状態に悪影響を与えていることが心配されていました。

そこで今回の修理では作品をガラス板から取り出し、歪んだ糸目を正しく揃えて和紙で裏打ちし、安定させる方法がとられました。これにより、やや青味をおびたガラス板自体の色や、裂に付着した汚れによって隠されていた色彩が鮮烈に甦り、作品本来の魅力、飛鳥・奈良染織の美しさを目の当たりにすることができるようになりました。



修理前の状況 (I-336-69)



刺繍残片

Embroidery fragments

絹製 平織、羅、刺繍 飛鳥時代・7世紀
I-336-97

金・銀の薄板を裁断し、絹の芯糸に巻きつけた「モール糸」を模様の輪郭に用いた華麗な作品。赤色の平絹に紫の羅を重ね、緻密に刺繍を行なう点は天寿国繡帳と共通している。また風車のように回転するパルメットを円形に収めた模様は、百済の軍守里廢寺から出土した埴（レンガ）にも認められる。



赤地辰羅

Red horara gauze fragment

絹製 辰羅 飛鳥-奈良時代・7-8世紀
I-336-111

隣り合う経糸どうしを絡ませて織り出した縵組織と、平組織を組み合わせた複雑な技法により、通常の羅とは異なった透模様が表わされている。飛鳥・奈良時代の染織品では法隆寺伝来品以外に類例が知られず、その数もごく少ない。小さな断片ながら、染織史上に重要である。



雑色横縞裂

Cloth fragment, with lateral stripes design in assorted colors

絹製 平織 奈良時代・8世紀
I-336-87

縹と白、赤と黄緑、紫と淡橙を撚り合わせた柰糸の段により横縞模様を表わした断片。両端に織耳が残ることから、当初からこの幅で織られたことがわかる。中央に折り山の痕跡が見られ、法隆寺伝来の綾幡残欠（N-319-18）では同種の裂を縁に用いていることから、この作品も同様に使われたと考えられる。



連珠円文綴織

Cloth fragments, with bead roundels design

絹製 綴織 飛鳥-奈良時代・7-8世紀
I-336-84

綴織によって極めて大型の連珠円文を表わすが、内部の模様は不明。なお、一部に白いリボンの先端と見られる図柄があり注目される。連珠円文の源流であるベルシャの遺品を参照すると、馬や鳥といった動物の首や脚をリボンで飾った例が見られ、この作品にも動物の模様が表わされていた可能性が推測される。

用語解説

経緋：染め分けた経糸を少しずつずらしながら模様を表わした緋織。法隆寺裂では獅嚙文や雲気文などが見られる。

裏錦：数色一組にした経糸を1本のように扱い、必要な色糸を表に出し、残りを裏に沈めて地と模様を表わした多色の絹織物。錦のなかでも古様な技法。

綴織：経糸は1色で、緯糸を模様の色ごとに織り入れて表わした絵画のような織物。色の境目に「ハツリ」と呼ばれる縦の隙間が見られる。

天蓋：古代インドにおいて高貴な人物に差し掛けた日傘が起源。やがて仏教に取り入れられ、仏像や高僧の頭上を飾り立てるのに用いられるようになった。

緯錦：緯糸に複数の色糸を用い、必要な色糸を表に出し残りを裏に沈めて地と模様を表わした多色の絹織物。日本では8世紀以降この技法が主流となる。

パルメット：扇状に広がる 棗椰子の葉を図案化した模様で、さまざまな装飾に用いられた。古代エジプトに起源をもち、シルクロードを経由して日本にも伝わった。

幡：仏教の儀式の際、寺院の内外を飾った旗。人体をかたどるように、三角状の幡頭、方形の坪を連ねた幡身、带状の幡足からなる。

平地浮文綾：平組織の地に、経糸を浮かせて文様を表わした綾。刺し子風に点々と表わすものや、規則的に経糸を斜めに連続して浮かせ、斜文を表わすものがある。

平絹：織物の中で最も基本的な技法である経糸と緯糸を1本おき交互に織り入れた平組織の絹織物。

柰糸：2色以上の色糸を撚り合わせて1本の糸としたもの。

羅：左右の隣り合う経糸どうしを絡ませ、これに緯糸を織り入れることで透模様を表わした織物。

甦った飛鳥・奈良染織の美 — 初公開の法隆寺裂 —

2014年8月19日発行

執筆：沢田むつ代・三田覚之（東京国立博物館）／編集・翻訳：東京国立博物館出版企画室／デザイン・制作：D_CODE／発行：東京国立博物館

©2014 東京国立博物館

